

## 自己の研究成果を文字として残そう

近藤二郎

1976（昭和51）年4月に、早稲田大学大学院文学研究科に考古学専攻（現・考古学コース）が誕生してから、今年で44年が経過しました。私自身は、早稲田大学第一文学部西洋史専修を1975（昭和50）年3月に卒業し、同年4月から大学院文学研究科西洋史専攻の修士課程に進学しており、1976年4月に、大学院に考古学専攻が設置されたことにより、考古学専攻修士課程2年に編入しました。

当時の文研の考古学専攻は、設置されたばかりであり、まだ学部で考古学専修が存在していなかったために、大学院の考古学コースの院生たちの発表の場もなく、当初は、早稲田大学考古学専攻院生協議会の名のもとで『文研考古連絡誌』という薄い印刷物を作成しました。第2号は、1978年12月に逝去された川村喜一先生の追悼号として発行しました。1980年に刊行された『文研考古連絡誌』第3号は、大学院生の論考を発表する雑誌として、私と谷川章雄氏の2本の論文を掲載することを決め、執筆者をはじめ、発行資金を皆で出し合うことで刊行にこぎつけたものでした。この『文研考古連絡誌』3号に掲載した「ゲルゼ文化期にみられる外来要素とその流入経路について」pp.1-11という私の論文は、私の最初に活字になった、ある意味では画期的な論文でした。この論考を自分で抜き刷りにして、その年の文部省（現・文部科学省）のアジア諸国等派遣留学生に応募し、その結果、1981年10月から2年間、カイロ大学考古学部に国費派遣留学生として滞在することが出来たのです。自分の論文を活字にすることがいかに重要なことか身をもって体験したのでした。

私は1983年10月にカイロから帰国しましたが、翌1984年4月から1986年3月まで文学部史学資料室（考古学資料室）の学生職員として勤務しました。1986年4月から、高橋龍三郎先生に代わり2代目の考古学の助手になりました。その時の史学資料室（考古学資料室）の学生職員が渡辺康弘さんであり、渡辺さんと私とで、『文研考古連絡誌』に代わる新しい大学院生のための雑誌作りにとりかかりました。最初の資金はなかったので、『文研考古連絡誌』第3号の発行時と同じく、院生から資金を募り、当時、ワープロ原稿で冊子を作成しました。名前も源流に溯って航海するということから『溯航』と名付けました。また、3号で廃刊になるような3号雑誌だけにはしたくなかったので、『文研考古連絡誌』第3号を引き継ぐ意味もあり、『溯航』の創刊号は、第4号となったのです。出来上がった雑誌を車に積んで、考古学協会の大会が行われる大学に運び販売しました。そして、その売り上げで次の雑誌を作り続けて行きました。それから35年近く経ち、今も私の命名した溯航が続いていることには感無量です。

本号は、論文1本、研究ノート1本、資料紹介1本、そして調査報告1本からなります。現在では、大学院生諸君が自らの論考を掲載することが出来る媒体は、40年前に比べると数多くあります。大学院に在学中に、多くの論考を発表し、文字として残す努力をしていただきたいと思います。